

太宰府天満宮門前町の土地利用の変化

3 回生 安部 遊野

1. はじめに

太宰府天満宮は福岡県太宰府市にあり、菅原道真を祀る全国約 12,000 社の総本山とされている。(太宰府天満宮 HP) また、「学問・至誠・厄除けの神様」として有名である。2019 年に発表された新元号である「令和」発祥の地としても有名となっている。

現地における説明看板によれば太宰府天満宮は古くから多くの参詣者を集めており、江戸時代では太宰府天満宮に参詣するとともに周辺の各所をめぐる「さいふまいり」が庶民の間でも浸透していた。太宰府天満宮の門前町はこの頃にはすでに盛えており、参道には太宰府天満宮の参詣者のための旅館や旅籠も多くあった。「参道にも近い大町などを中心に旅館・旅籠があり、明治期には参道沿いに十数軒から二十軒ほどの旅館が並び、大町から馬場にかけて芸者の所属する券番も三か所あったという。」(堤, 2004) ともあるように太宰府天満宮の門前町は、明治期にも多くの旅館や旅籠で賑わっていた。しかし鉄道の開通により、アクセスが良くなると太宰府の旅館業は衰退していった。近年での門前町は参詣者や観光客向けの飲食店や喫茶、土産物店が多く立ち並び、日本全国、さらには海外から多くの観光客が訪れる観光地として賑わっている。

門前町について取り上げた論文では、筑波山とその門前町のある地域がどのようにして観光空間として変容したのかを明らかにした猪股ほか(2018)や、成田山新勝寺門前町の景観の整備と門前町の商店の変容を述べた橋本ほか(2010)などがあるが、門前町の土地利用の変化と観光の関連について取り上げた論文は少ない。そこで本稿では、太宰府天満宮の門前町を対象に 1970 年・1995 年・2019 年の住宅地図や聞き取り調査によって作成した土地利用図を元にその変化を分析し、太宰府天満宮の門前町における観光形態や土地利用の変化のパターンに注目して述べていく。

2. 太宰府の観光状況

太宰府市の観光の中心となっているのは、本稿でも取り上げる太宰府天満宮とその周辺にある九州国立博物館や門前町である。福岡市内から車で約 30 分というアクセスの良さもあり、毎年、多くの観光客で賑わうスポットとなっている。太宰府市観光推進課による

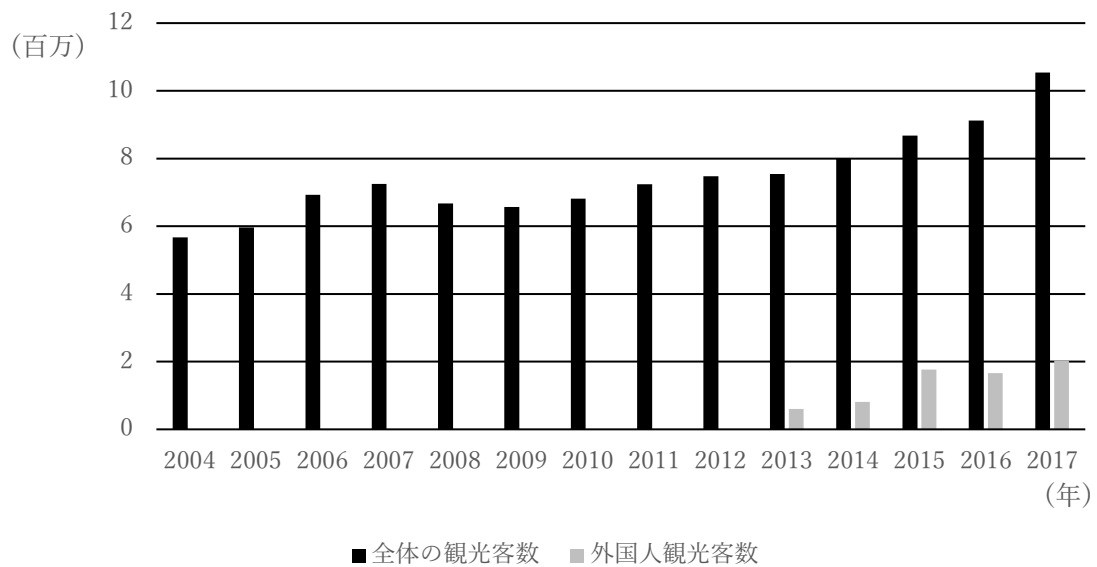


図1 太宰府市における観光客数の推移

資料：太宰府市役所資料より作成

と観光客の多くが太宰府天満宮やその周辺に集中し、他の観光スポットへは観光客が集中しないといった状況もあるという。

図1は、太宰府市における観光客数の推移である。太宰府市における全体の観光客数は、2005年から2007年に急激に増加し、2007年に700万人を超えた。その後、2年間は減少していたが、2009年以降再び増加し続け、2017年には、1000万人を超えている。2005年から2007年の観光客数の急激な増加は太宰府市観光推進課によると、2005年に太宰府天満宮の近くに九州国立博物館が開館したことが影響していると考えられるという。また、外国人観光客数は2014年から2015年にかけて急激に増加しており、2017年には200万人を超えている。外国人観光客数の2014年から2015年の急激な増加は、太宰府市観光推進課によると2014年の入国ビザの規制緩和により中国人観光客が急激に増加したことが影響していると考えられ、さらに博多港に入港するクルーズ船が近年急激に増加しており、そのクルーズ船からの観光客の観光ルートに太宰府があり、大型バスでの集団の外国人観光客も増加しているようだ。

次に月別観光客数をみていく。図2は2017年における太宰府市の月別観光客数であり、表1は太宰府天満宮・門前町における行事・イベントである。図2を見ると1月の観光客数が他の月に比べて圧倒的に多く350万人を超えている。これは、1月に太宰府天満宮への初詣を目的とした観光客が多いことが影響していると考えられる。1月以外の月では3月と9月に観光客数が多くなっている。3月に観光客が多くなるのは太宰府市観光推

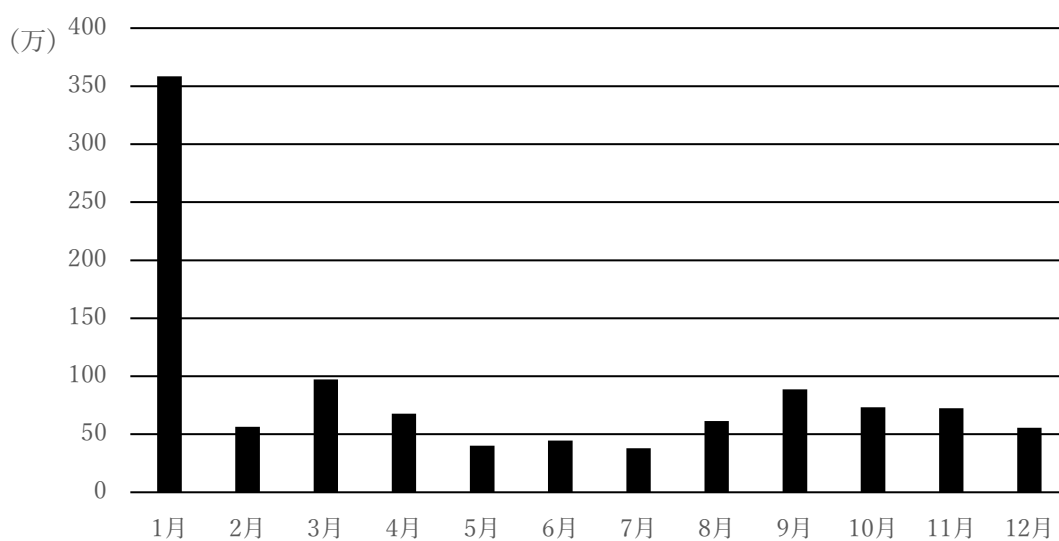


図2 2017年における太宰府市の月別観光客数

資料：太宰府市役所資料より作成

表1 太宰府天満宮・門前町におけるイベント・行事

月	イベント・行事
1月	歳旦際
2月	梅の花見ごろ(~3月)・節分厄徐大祭 梅花祭・門前まつり(~3月)
3月	曲水の宴 梅上げ
4月	学業祈願祭
5月	こどもの日祭
6月	花菖蒲見ごろ
7月	七夕の宴 夏の天神まつり
8月	注連打奉納相撲
9月	神幸式大祭
10月	秋思祭
11月	菊花展
12月	大祓式

資料：太宰府市観光協会

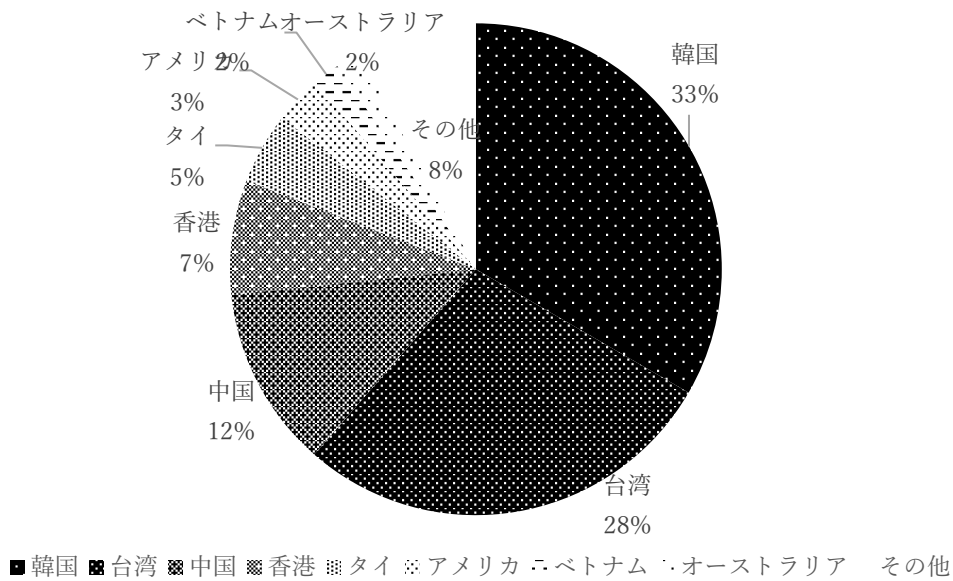


図3 西鉄電車で訪れた外国人観光客の国籍割合

資料：太宰府市商工会資料より作成

進課によると太宰府天満宮の梅の花が見頃を迎えるためであり、9月は、修学旅行のシーズンとなるため多くの修学旅行生が太宰府天満宮を訪れるためだということであった。表1は太宰府天満宮とその門前町における主なイベントや行事である。主な行事としては、1月には元旦に行われる歳旦祭があり、2月から3月には、梅の花が見頃を迎え、梅花祭や門前町が中心となって行われる門前まつりがある。図2と表1より、太宰府市における月別観光客数は太宰府天満宮やその門前町への観光客が大きく影響していると言える。

次に、太宰府天満宮への外国人観光客の国籍割合を交通機関別に見ていく。図3は、西鉄太宰府駅に電車で訪れた外国人観光客の国籍割合である。図3を見ると、西鉄電車によって訪れる外国人観光客は、韓国人が33%で最も多くなっており、次に台湾人28%、中国人12%となっている。図4はバスライナー「旅人」で訪れた外国人観光客の国籍割合である。バスライナー「旅人」は、博多駅のバスターミナルから大宰府へ行く便と福岡空港の国際線ターミナルから大宰府を結ぶ便があり、博多駅バスターミナルから大宰府が平日24便、土日祝日が41便、福岡空港国際線ターミナルから大宰府が平日23便、土日祝日が41便となっている。図4を見るとバスライナー「旅人」を利用するのは、韓国人が83%となっており、ほとんどの利用者が韓国人となっている。図5は、太宰府駐車センターに停まった団体旅行の観光バスにおける国籍割合である。観光バスについては、中国が最も多くなっており、53%となっている。次に韓国が35%となっている。図3～図5を比較すると、西鉄電車は、中国、韓国、台湾の他に、アメリカやオーストラリアなどのアジ

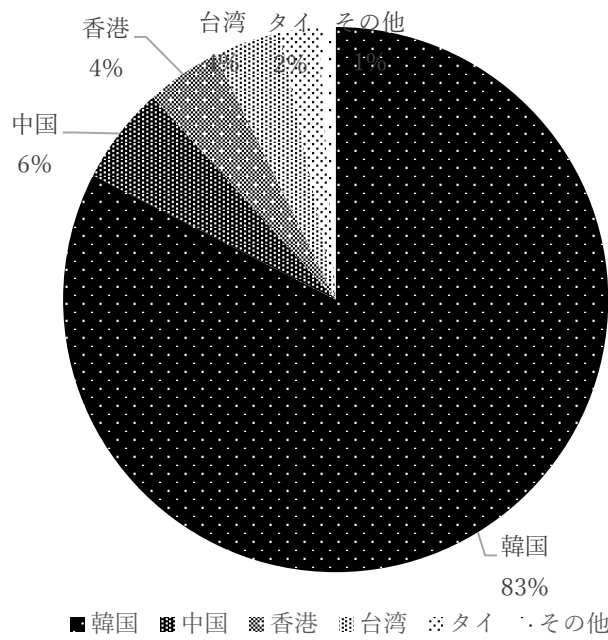


図4 バスライナー「旅人」で訪れた外国人観光客の国籍割合
資料：太宰府市商工会資料より作成

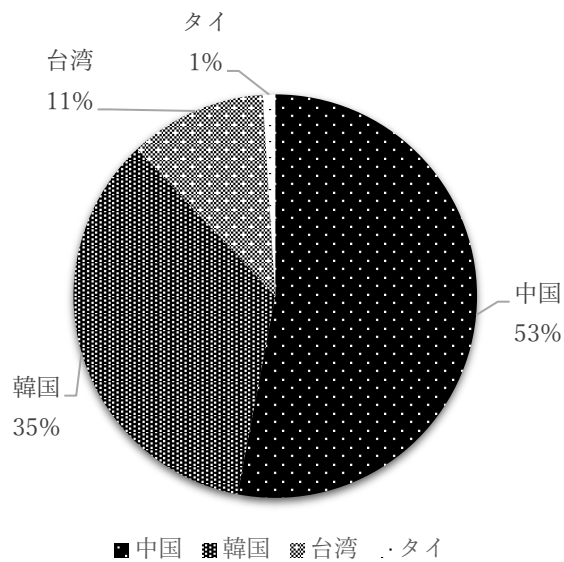


図5 太宰府駐車センター駐車車の国籍割合（バス）
資料：太宰府市役所資料より作成

ア以外からの観光客も多く利用しているが、バスライナー「旅人」や太宰府駐車センターの観光バスでは、ほとんどが韓国や中国を中心としたアジアの国が多くなっている。これは、中国や韓国などの国は団体旅行の場合が多いが、アメリカやオーストラリアの観光客は個人旅行がほとんどであるためだと考えられる。また、バスライナー「旅人」における外国人観光客は多くが韓国人なのに対して、太宰府駐車センターでは中国人が多くなっている。太宰府駐車センターでは、大型バスを停めるためには、事前に予約がいるため博多港に着くクルーズ船からの団体観光客が多くなるため、クルーズ船によって多く訪れる中国人観光客の割合が多くなっている。それに対して、韓国人観光客は福岡以外の観光地にも訪れる人が多いので、福岡空港と博多駅から太宰府へ行く、バスライナー「旅人」によって太宰府を訪れる割合が高くなる。

3. 太宰府天満宮門前町の土地利用の変化

次に、太宰府天満宮の門前町の土地利用の変化について、1970年、1995年、2018年の土地利用図を比較してその変化を分析していく。図6は、太宰府周辺である。太宰府天満宮の参道は、天満宮から西に向かって伸びている。土産物店や飲食店、喫茶店などは、参道沿いに駐車場付近まで多く立ち並んでいる。今回の調査対象範囲は、図6に示した天満宮から西鉄太宰府駅までの約300mの参道沿いの地域である。

図7は、1970年における太宰府天満宮門前町の土地利用図である。この時期にはすでに、観光地として有名であったため、多くの飲食店や土産物店が立ち並んでいる。飲食店は、参道を挟んで北側に多くあり、土産物店は南側に多く立地している。また、この時期には参道沿いに住宅も5軒あった。さらに、太宰府天満宮の参道には、画廊などの美術品店や伝統工芸品を扱う工芸品店なども立地している。

図8は、1995年における太宰府天満宮門前町の土地利用図である。この時期にも土産物店や飲食店、喫茶店が多く立地している。この時期も土産物店は参道の南側に多く立地している。また、この時期の特徴としては、明太子店や漬物店などの食品店が参道の北側を中心に多く立地している。美術品店や工芸品店も多く立地しており、久留米餅のような染物店が多くなっている。

図9は、2018年における太宰府天満宮門前町の土地利用図である。この時期の参道沿いでも、土産物店や飲食店、喫茶店が多く立地している。この時期も土産物店は、参道の南側に多くある。また、参道沿いの東側の門前の地域に土産物店や飲食店、喫茶店が密集している。さらに硝子工芸や染物などの工芸品店も多い。

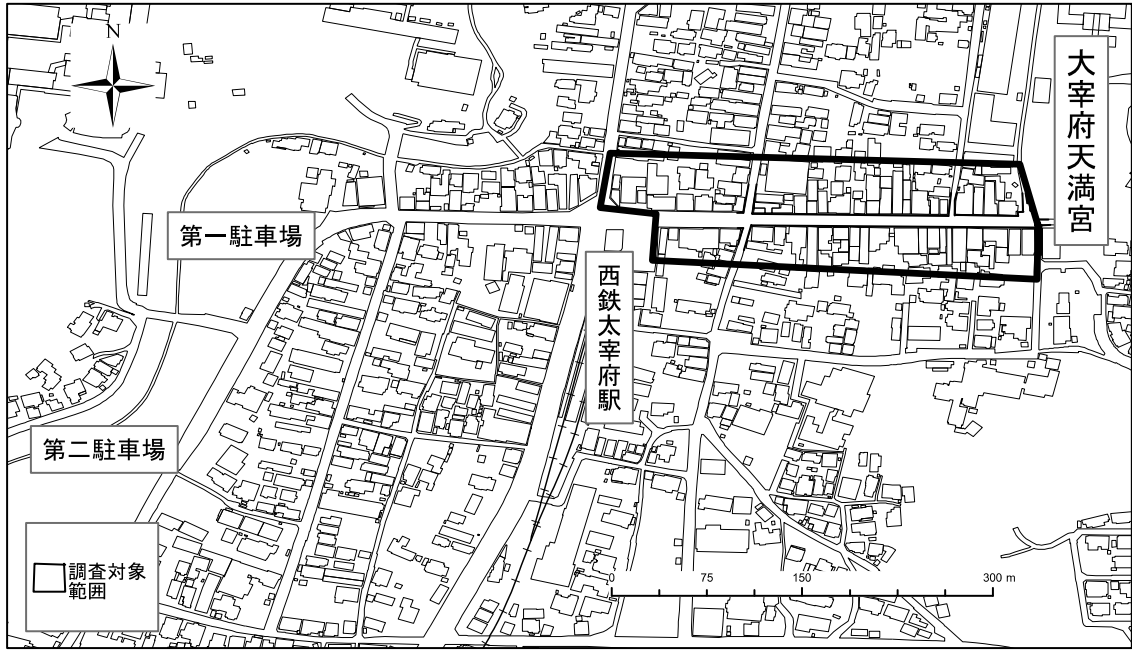


図6 太宰府天満宮周辺と調査対象範囲

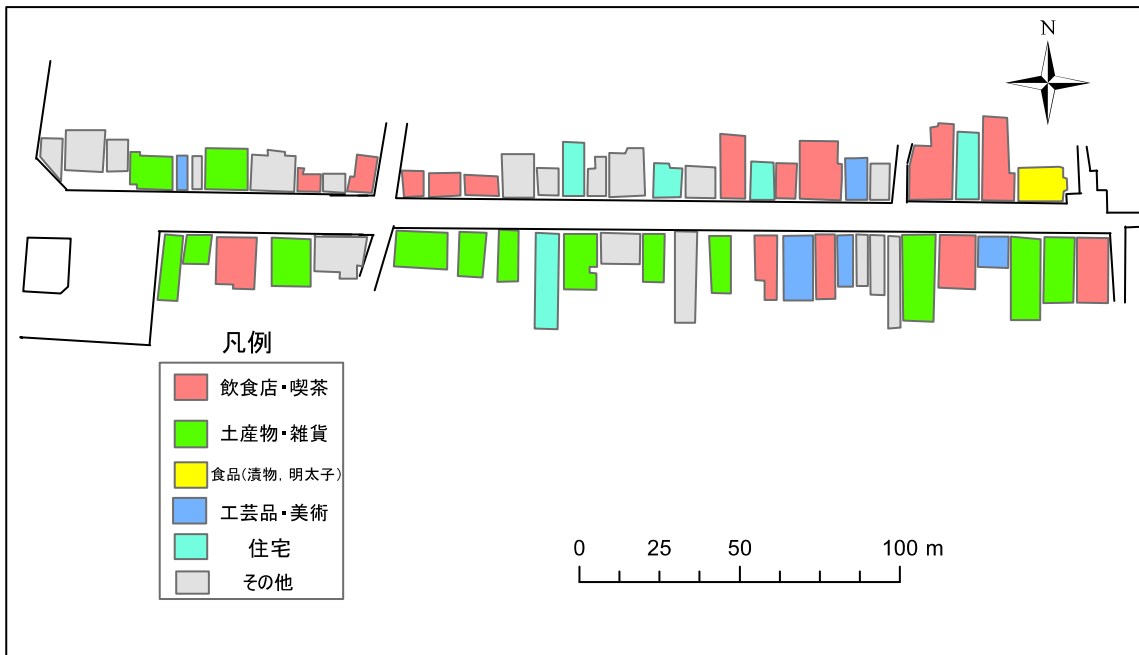


図7 太宰府天満宮門前町の土地利用図（1970年）

（住宅地図より作成）

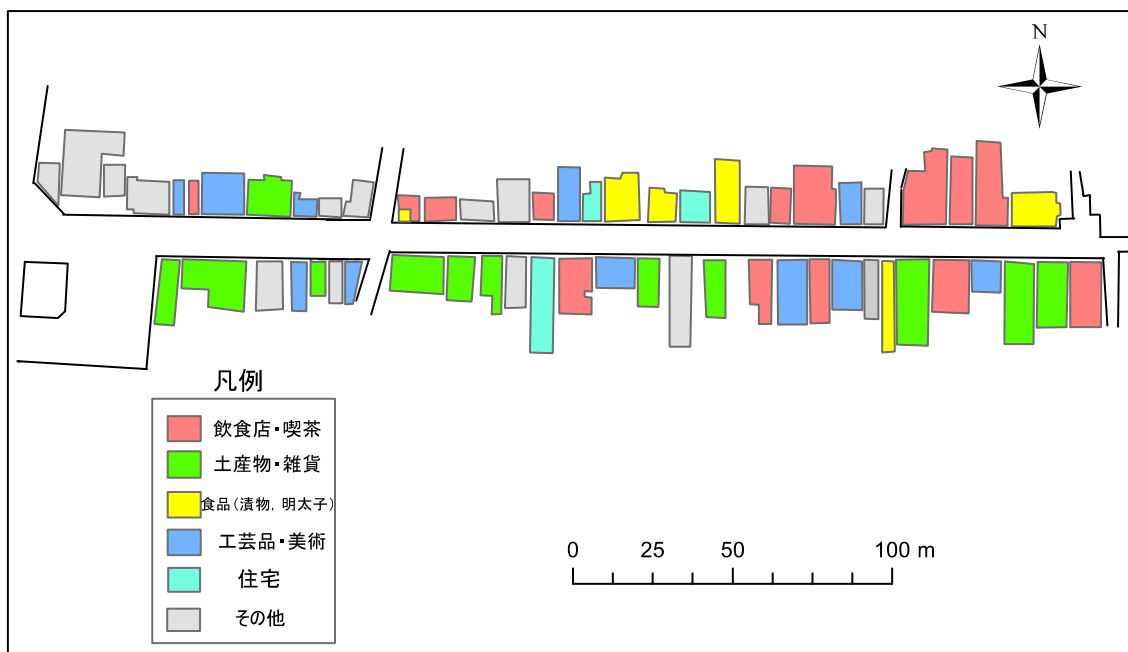


図8 太宰府天満宮門前町の土地利用図（1995年）

（住宅地図より作成）

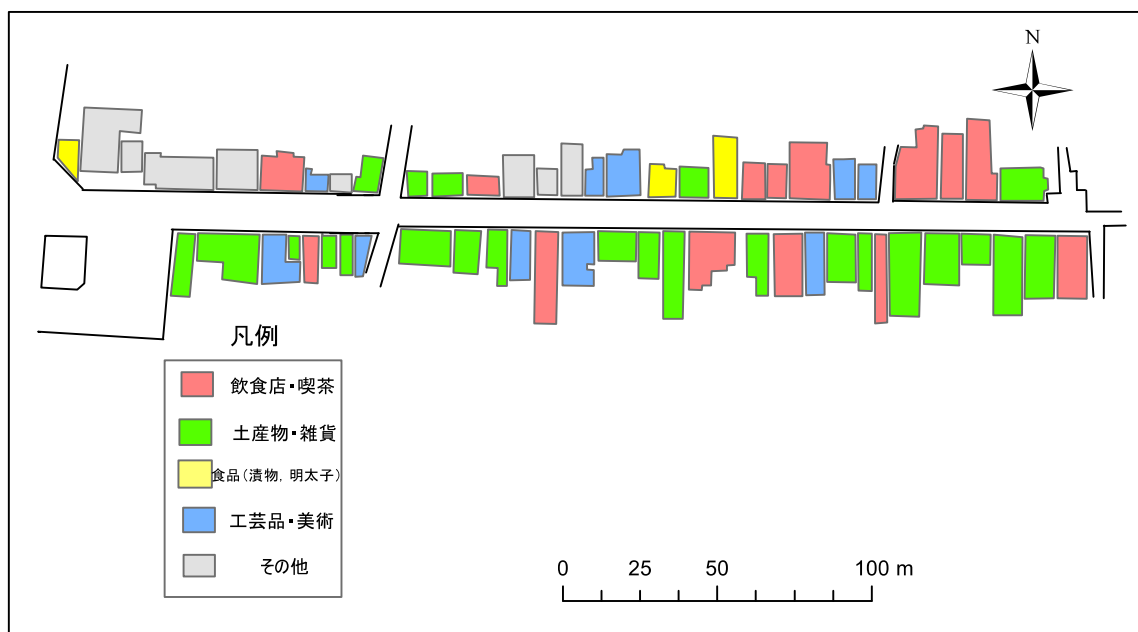


図9 太宰府天満宮門前町の土地利用図（2018年）

（住宅地図より作成）

次に、1970年、1995年、2018年の土地利用を比較していく（表1）。まず、全体的に見ると、1970年から1995年では、土産物店や飲食店、喫茶店の数は減少しているが、1995年では美術品店や工芸品店、食品店が増え、1970年に比べ、店の種類が増えている。2018年では、1995年に比べ、土産物店や飲食店、喫茶店が増え参道沿いのほとんどの店が観光客向けの店となった。住宅に着目すると、1970年では、今回調査した参道沿いの範囲に、5軒あったが、1995年には、3軒となり、2018年には、1軒もなかった。これは、1970年ごろは、参道沿いも観光客向けの空間の中に住宅などの生活空間も残っていたが、2018年には、ほとんどの範囲が観光客向けの店となってしまったためである。次に、明太子店や漬物店に着目する。1970年には、漬物店が1軒であったが、1995年には、明太子店や漬物店が増えた。2018年になると明太子店が3軒となり数は減少した。次に、美術品店や工芸品店に着目する。1970年には、美術品店・工芸品店は5軒であったが、1995年には、11軒に増加した。2018年では、10軒と大きく変化はなかった。美術品店・工芸品店は、1970年では、陶磁器など九州の伝統工芸品を扱う店や画廊などが立地していたが、1995年には、久留米市で主に製造されている染物である久留米緋を扱う店やガラス工芸を扱う店などがあられ、2018年には、人形店や箸店など美術品店・工芸品店の種類が増えた。

4. 門前町の観光の変化

前項では、太宰府天満宮門前町の土地利用図を用いて、1970年から2018年における土地利用の変化をみてきた。ここからは、太宰府天満宮の門前町観光がどのようにして変化してきたのかを中心に述べていく。まず飲食店の変化について述べていく。図7～図9からもわかるように、年代を問わず、飲食店は太宰府天満宮の参道沿いに多く立地している。その多くが、太宰府天満宮への観光客向けの飲食店となっている。住宅地図を見ると1970年頃では、飲食店の中に「食堂」の記述があるものがいくつか見られる。住宅地図では、「食堂」となっているが、古くからの門前町の店主によると、一般的な食堂のような、昼食や夕食を提供するものではなく、比較的軽い食事を提供する、喫茶店のようなものであったということである。1970年頃では、太宰府天満宮への観光客に向けたこのような喫茶店のような「食堂」が多くあった。1995年頃でも1970年同様の軽い食事を提供する喫茶店や土産物店に付随した喫茶店が多く立地していた。太宰府天満宮とその門前町での観光は、滞在時間が短い傾向があり、1970年や1995年の飲食店は、軽い食事を提供する喫茶店のような店が多くなっている。2018年における参道沿いの特徴は、大きく2つあ

	1970年	1995年	2018年
飲食店・喫茶店	15	14	14
土産物・雑貨	14	12	24
食品（漬物・明太子）	1	6	3
工芸品・美術	5	11	10
住宅	5	3	0
その他	18	15	8

表1 門前町における業種構成の変化

資料：太宰府観光協会 HP・現地調査

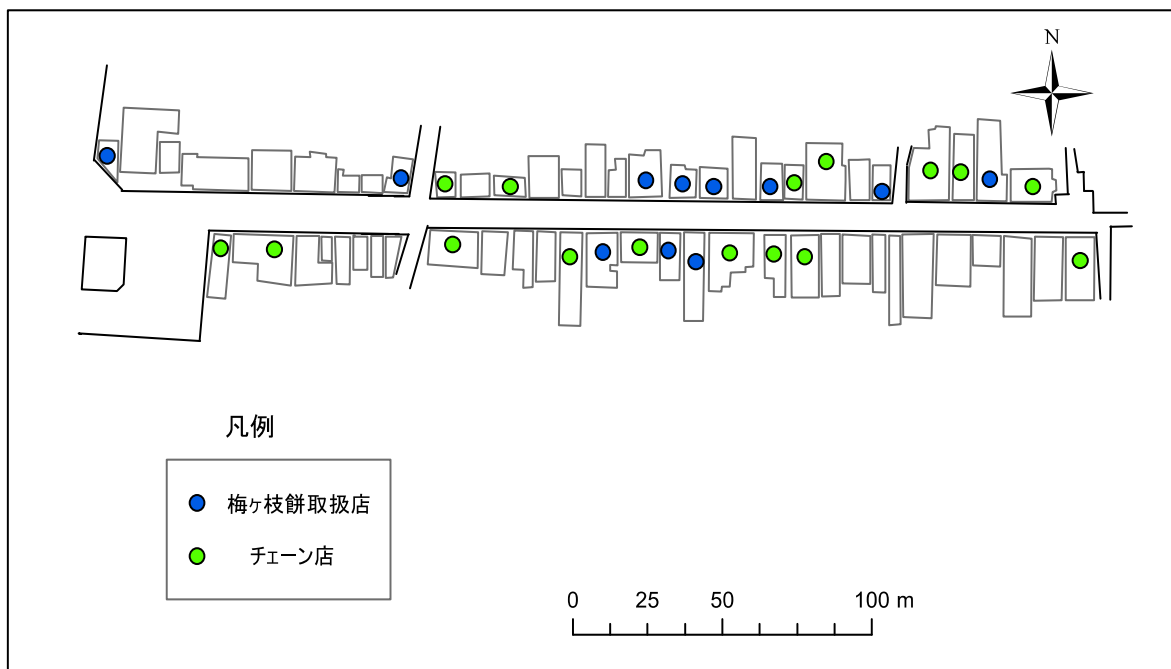


図10 太宰府天満宮門前町における梅ヶ枝餅取扱店とチェーン店

資料：太宰府観光協会 HP・現地調査

る。まず1つ目は、2018年では、食べ歩きできるようなものを提供する店が多くなっているという点である。2018年では、団体旅行の外国人観光客が増え、時間が限られた中で、食べながら土産物店も見るといった観光客が増えたためだと考えられる。2つ目は、もともと参道沿いに店を出していた店舗とは違う外資系や太宰府以外に本社や本店を持つチェーン店が増えている点である(図10)。その中には、1つの経営主体が門前町に2店舗持っているものもあった。

調査した1970年から2018年におけるここまで述べてきた飲食店の変化や前項の土地利用の変化の背景には太宰府天満宮の門前町におけるテナントがある。門前町には、テナントである店舗が多くなっており、店舗の入れ替わりが激しくなっている。特に門前町の中でも中心的な馬場参道沿いや大町参道沿いは人気であり、テナントが空きになってもすぐに新しい店舗が入り、太宰府観光協会によると、テナントが空くのを待っている状態の店舗もあるという。店舗の入れ替わりが激しいため、門前町を訪れる観光客のニーズに合わなくなった店舗はなくなり、新たにニーズにあった店舗ができるといったように変化していった。

大きく変化しているテナントの店舗に対してあまり変化していない店舗もある。その形態が変化していない店舗の多くは、太宰府の名物でもある梅ヶ枝餅の取扱店で、梅ヶ枝餅協同組合に入っている店舗である(図10)。梅ヶ枝餅協同組合は1953年に発足したが、梅ヶ枝餅店の新規参入は認められていない。このため、現在、梅ヶ枝餅協同組合に加盟している梅ヶ枝餅の取扱店は、経営の主体は変わっておらず、店舗の形態も大きく変化はしていない。梅ヶ枝餅を取り扱っている店はテナントの店舗に対して大きな変化はないという特徴があった。

5. おわりに

ここまで、2章では太宰府の観光の状況と変化、3章では太宰府門前町における土地利用の変化、4章では、門前町の店舗の変化について述べ、太宰府とその門前町の変化を分析してきた。太宰府の観光状況としては、太宰府市への観光客の多くが太宰府天満宮への観光客となっており、西鉄電車やバスライナーなどの公共交通機関も太宰府天満宮が中心となっている。また、近年、外国人観光客が急増しているという特徴もある。その多くは中国や韓国などからのアジア系の観光客である。それに伴って外国人の団体旅行客も増加した。

太宰府天満宮の門前町の土地利用にも変化が見られた。美術品店・工芸品店は、1970年から1995年にかけて増加し、2018年にはその種類が多様化した。明太子店や漬物店の食品店は、1970年には一軒であったが、1995年には大きく増加した。2018年には食品店は

再び減少した。また、1970年にはまだ住宅も存在し、門前町にも生活空間が残っていたが、2018年には、今回調査した参道沿いには住宅は一軒も無く、観光客向けの飲食店や喫茶店、土産物店が増加し、1970年や1995年に比べ観光客向けの空間となっていた。

門前町の店舗は、比較的最近できた新しい店舗と昔からある店舗で大きく異なっている。比較的最近できた店舗の多くは、テナントであり、観光客のニーズに合わせて入れ替わりが頻繁に起こり、店舗の形態も変化するのに対して、昔からある店舗は、その形態に大きな変化が無いものが多くなっている。その中で門前町の店舗は変化のパターンが大きく分けて3つあることがわかった。1つ目は、梅ヶ枝餅取扱店など昔から主体も業種も変わらない店舗、2つ目梅ヶ枝餅取扱店の一部やそのほかにもある、経営の主体は変わっていないが業種が変化したり、扱うものが多様化したりした店舗、3つ目はテナントの店舗のように経営の主体自体が変わっている店舗である。太宰府天満宮の門前町では、観光客のニーズに合わせて変化するテナントの店舗と太宰府名物の梅ヶ枝餅を取り扱う店舗を中心とした昔からの店舗がともに立地するという特徴があった。

参考文献

堤研二，2004年，太宰府の観光，川添昭二 編「古都太宰府の展開」太宰府市 p338.

猪股ほか，2018，筑波山における観光空間の形成と変容：山麓門前町の地域変化に着目して，地域研究年報 40，181－218.

橋本ほか，2010，成田山新勝寺門前町における街なみ整備と商業空間の変容，地域研究年報 32，1－41.

太宰府観光協会HP <https://www.dazaifu.org/map/monzen/index.html>(最終閲覧日12月27日)

太宰府天満宮HP <https://www.dzaifutenmangu.or.jp> (最終閲覧日1月9日)